

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：82105

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H04344

研究課題名(和文) 世代間継承を折り込んだ地域森林管理方策の解明 - ライフコース分析の応用 -

研究課題名(英文) Applying a life course theory to the regional forest management policy including a perspective of intergenerational succession

研究代表者

山本 伸幸 (Yamamoto, Nobuyuki)

国立研究開発法人森林研究・整備機構・森林総合研究所・主任研究員 等

研究者番号：90284025

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、世代間継承の視点を折り込んだ地域森林管理方策を提示することを目的とした。集落、担い手、女性、当事者性、教育、産業、環境という地域森林管理を考えるうえで重要なテーマについて、個人的時間と社会的時間の関係を考察するライフコース分析の手法で取り組み、多くの成果を得た。特に、樹木の成長に象徴される森林の刻む時間に焦点を当て、それと個人的時間、社会的時間の関係を捉えようとした点の特筆される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

樹木の生命は数十年、数百年に及ぶため、地域における森林管理を考える際には長期の時間スケールを必要とする。しかし、そこに携わる人の寿命は長くても百年程度であり、森林のスケールに比較して、非常に短い。一人の人間の一生では抱えきることできない森林管理の長期の時間スケールを、人はこれまでどのように克服しようとしてきたかという答えを、本研究では歴史の中に探り、その可能性を提示したことに社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to present a regional forest management policy that incorporates the perspective of intergenerational succession. We used a life course analysis approach to examine the relationship between personal time and social time in relation to the important themes of regional forest management, such as communities, leaders, women, positionality, education, industry, and the environment, and obtained many results. The study is particularly noteworthy in that it focuses on the time that is ticked by the forest, symbolized by the growth of trees, and attempts to capture the relationship between this time and personal and social time.

研究分野：森林科学、森林政策、歴史社会学

キーワード：ライフコース分析 世代 森林管理 林業 地域 歴史社会学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

樹木の生命は数十年、時として数百年に及ぶため、地域における森林管理を考える際には長期の時間スケールを必要とする。それに対し、森林を管理する人の寿命は長くても百年程度であり、統計上の生産年齢ならば15才から65才までの50年間、現代日本では何らかの就業にある期間は30~40年間程度であることが多い。一人の人間の一生では抱えきることできない森林管理の長期の時間スケールを、人はこれまでどのように克服しようとしてきたのだろうか。その答えを歴史の具体の中を探ろうとしたのが、本研究の出発点である。

一人の生涯の時間で足りないならば、子や孫などの次世代へと森林管理を継承し、世代の連鎖の中で長期の時間を担保していく必要がある。近世以前の日本では、地域社会の安定性が、長期の時間に及ぶ森林管理を保証し、継続的な森林利用の営みが続けられてきた。

明治期に入り、殖産興業の波が日本全体を覆い尽くした近代以降、地域社会に市場経済が浸透する中で、社会の流動性も高まり、それ以前のような地域社会の安定性が必ずしも自明ではなくなった。人びとは不安定化した地域社会を代替する様々な社会関係を新たに見つけ、作りだし、地域森林管理を次世代へとつなぐ努力を続けてきた。

現在、日本では、木質材料やバイオマスエネルギーへの期待、農山村地域での暮らしに関心を寄せる若年世代の増加など、地域森林管理へとつながる可能性のある追い風がかつてになく吹いている。しかしながら、一方では、農山村地域の高齢化、労働力不足、伐採放棄地等、問題は山積しており、いつ向かい風へと転じるか分からない。

とはいえ、1960年代に木材輸入自由化が始まって以降、日本において、これほど多くの人びとが森林へと関心を向けるのは久しぶりのことである。この情熱を、どのように次世代へと継承し、未来の地域森林管理像を描けばよいだろうか。以上が本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、世代間継承の視点を折り込んだ地域森林管理方策を提示することである。

ここで地域森林管理とは、林業、木材産業の経済セクターのほか、国、地方公共団体などの行政セクター、加えて、森林を取り巻く地域セクターといった様々な人びとの協同によって実現している。本研究では、経済セクター（森林技術、林業労働、木材産業）、行政セクター（林野行政、林業教育）、地域セクター（地域組織、地域社会）の、大きく3セクターに括ることのできる7つの側面から地域森林管理を捉え、過去の知見から将来への手掛かりを探る。

3. 研究の方法

本研究ではその方法的基礎として、ライフコース分析を援用した。ライフコース分析はアメリカの家族社会学が、発達心理学の成果を採り入れる中から案出された方法である。日本では1980年代に研究が試みられるようになった。日本へのライフコース分析導入に重要な役割を果たした家族社会学者の森岡清美は、理論の提唱者であるアメリカの社会学者エルダーを引きつつ[Elder 1977]、ライフコースを「個人が年齢別の役割や出来事(events)を経つつ辿る人生行路(pathways)」と定義した[森岡ほか 1996: 1]。

人はそれぞれの生涯にわたる人生行路において、ある時代に起こった出来事に偶然巡り合わせる。ライフコース分析では、その巡り合わせたタイミングで、人がどの年齢段階であったかに注目する。たとえば、同じ戦争に遭遇したとしても、赤ん坊と青年、あるいは高齢者ではその際の役割、立ち居振る舞いは異なっており、その差異が重要と考えるわけである。このタイミングと年齢段階をキーとして、個々人の私的経験と社会的出来事に結節点を見だし、そこから個人と社会それぞれの理解をより深めようというのがライフコース分析の基本的アイデアである。

ライフコース分析のキー概念の一つである「コーホート」は、もともと人口学の概念であり、同時出生集団とも訳される特定の出生年に基づく年齢グループを意味する。統計操作可能なため、将来人口推計などに用いられる。ライフコース分析では、コーホート概念を世代と社会との関係把握に用いる。

戦争のような大きな社会的出来事に遭遇し、歴史の烙印を穿たれたある一定の年代層のコーホートは、単なる年齢階で区切られた統計的集団という意味合いを超え、「世代」とも読み替え可能な、同じ社会的経験を共有した社会的実態を有する集団として把握されると仮定する【(4)】。そうすることで、「救いがたく多岐多様な資料を整理して社会的歴史的变化をあらわにする道が開」ける[森岡 1993: 225]。

現在ではアメリカ社会学会を中心に、ライフコース分析に関する浩瀚なハンドブックも編纂され、多くの分析ツールや概念が提案されている[Elder and Giele eds. 2009=2013; Shanahan et al. eds. 2015]。アメリカの研究では、個人情報長期履歴といった膨大なデータセットに基づく研究が数多く実施されてきた。また、日本でも、計量社会学のグループが実施した社会階層と社会移動全国調査(SSM調査)等の長期データによる研究がある[岩井 2015; 金子 2022]。

こうした定量研究の進展が見られる一方、本節の冒頭で述べた森岡清美をはじめとした家族社会学者らのように、エルダー[Elder 1974=1991]の流れを汲んだ定性研究もまた、森岡[1991]

などの多くの貴重な成果を生んだ。本研究の関心と近い農村社会学では、農家の生活史研究のような、人の生涯に見られる周期性に着目したライフサイクル分析に対し、人の生涯を歴史の文脈に位置づけ、社会経済からの影響を重視するライフコース分析の研究がある[石原 1996；大内 2000]。本研究は定性研究の系譜に連なり、農村社会学と関心を共有するが、森林と地域社会との関係を家族にとどまらず、集落、産業、行政などまで関係する人々の範囲を広げた。

ライフコース分析の重要な概念の一つとして、世代、コーホートに加え、「コンボイ(convoys)」がある。「道づれ」とも訳されるこの概念は、アメリカの文化人類学者プラスによって、日本研究の著作の中で用いられた。それは「ある人の人生のある段階を通じてその人とともに旅をしていく親密な人びとからなる独特の集団」を意味する[Plath 1980 = 1985 : 24]。たとえば、ある人にとって、配偶者は長くコンボイである一人の可能性が高いだろうし、また、地域社会における幼馴染の集団もその一つであろう。人の一生において、コンボイの影響もまた重要である。

老若男女様々の互いに異なる生年の人間同士が、同時代に共存することによって社会関係が生じる。人の生死によって社会の構成員は常に入れ替わり、過去の影響を受けつつ、社会関係は変動する。ライフコース分析はコーホートをマクロの社会動態とミクロの人間行動の相互連関をつなぐキー概念として、個人の一生を歴史の中に観察し、その社会関係の変動との関係を描くことで、社会の動態を明らかにしようとする。

本研究では、集落、担い手、女性、当事者性、教育、産業、環境という森林と社会の関係を考えるうえで重要な7つの側面をテーマとして、ライフコース分析の森林科学分野への援用に取り組んだ。

4. 研究成果

(1) 集落と森林の関係に焦点を当てた分析では、新潟県上越市の山あいの不動山一帯を共有してきたサンガザと呼ばれる3つの集落の明治以降の軌跡について、集落財政や屋号、家屋、家族の変遷を追い、そこに暮らす3世代の住民のライフコースを抽出した。その結果、世代間の年齢差が20歳違っただけで、高度経済成長期を経た地域の暮らしのあり方はまったく異なるものであることが確認された。これらの実証研究を通して、将来に向けて、この地域でも人口減少がほぼ確実な中、先人の築いてきた歴史と地域の自然資源を基礎に、新たな世代がこれまでとは異なるが、しかし、確実な暮らしを続ける可能性が示された。

(2) 森林管理の担い手に関する分析では、長野県伊那市で戦後林業とともに林学者人生を歩んだ信州大学教授の島崎洋路が、信州大退職後に設立した島崎山林研修所(島崎山林塾)を研究対象とした。「山造り承ります」と看板を掲げた島崎の引力は、延べ970人の塾生を引き付けた。本研究では、島崎のもとで山造りに出会った人びとそれぞれのライフコースと、島崎自身のライフコースを分析した。その結果、社会経済の変化、各人それぞれのライフコースに応じた関心、戦後広く造林された人工林の資源状態の変化の間の複層的な関係が見いだされた。特に、人工林の資源状態によって、担い手と森林との関係は、造林から初期の手入れ、間伐、主伐と変化することは、森林資源の重要な特徴であることが指摘された。

(3) 女性に関する分析では、栃木県日光市で7百年続く福田家に嫁いだ福田栄子のライフコースを軸に、福田と共に時代を生きた複数世代の女性たちの群像を描くことで、女性たちが山村社会の継承に果たしてきた役割を析出した。その結果、山村社会の女性にとって、特にコンボイの役割が重要であることを指摘した。これらの実証分析を通して、2020年代を迎え、団塊世代である70歳代、男女雇用機会均等法第1世代である50歳代、林業女子会世代の30歳代の3世代が山村と関わる中、新たな地域社会を構築し、森林を継承していく課題について展望した。

(4) 森林管理を当事者として長期的に誰が担うかについての分析では、明治期以降の国の林政と静岡県天竜地域および富士南麓の対比を通し、そこに関わった人々のライフコースから、森林管理における当事者性を考察した。その結果、現在まで続く、国や地方自治体の行政組織・制度を中心とした地域森林管理の限界性を超えて、具体的生活世界を背景とした地域の当事者性に、将来に向けた展望を見出した。

(5) 森林・林業教育に関する分析では、1970年代から90年代にかけて鹿児島大学農学部林政学教室教授であった赤井英夫とその門下生達のライフコースをたどり、日本の戦後森林政策を跡づけた。その結果、赤井が70年代から80年代にかけて描いた並材を中心とした日本林業発展の見取り図は、林野庁官僚となった赤井の門下生たちによって、21世紀以降、実現を見たことが見いだされた。これらの考察を通して、大学における応用科学としての森林科学が、科学と社会とを架橋し、森林管理の基礎となる可能性が提示された。

6) 産業に関する分析では、東京帝国大学林学科を卒業し、王子製紙副社長を務めた小林準一郎と王子製紙の専属請負人として山林現場作業を担った坂本竹次郎のライフコースに着目した。その結果、日本の近代資本主義の展開の中での、森林資源をめぐる紙パルプ産業の発展と地域の社会や森林の関係が時に歩みを同じくし、時にまったくかけ離れる態様が把握された。それらの

考察を通して、現代にも通じる、現代社会における持続可能性の困難性が見いだされた。

7) 環境に関する分析では、2011年に東日本大震災、原発災害を被った福島県浜通り地域の近代化の歩みを、楢葉町木戸でかつて生きた、製材業者・石川浅次郎と山林局森林技術官僚・菅田裕のライフコースを対処プとした。その結果、明治以降の時代の変遷の中で、モミをはじめとした阿武隈山地の森林資源への社会からの要請は大きく変化してきたことが見いだされた。それらの考察を通して、原発災害後の福島県浜通り地域の森林資源管理について、放射線セシウムによる困難性とそれを乗り越えようとする人々の営みの可能性の両面を指摘した。

8) 以上の7つの側面をテーマとした研究を総括し、森林科学、ライフコース分析、アナル学派のこれまでの学術的方法論に対して、本研究の意義を整理した。特に、アナル学派がこれまで依拠してきた「地理的な時間」、「社会的な時間」、「個人の時間」の3層構造について、樹木の成長に象徴される森林の歴史を加えて、森林と社会の関係を描くことの重要性を提示した。

<引用文献>

- 石原豊美[1996]『農家の家族変動：ライフコースの発想を用いて』日本経済評論社
- 岩井八郎[2015]「視点 ライフコースの100年・ライフコース研究の30年」『ソシオロジ』60-1：109-111
- 大内雅利[2000]「農民のライフコースと戦後農村社会史」『明治大学農学部研究報告』122:1-23
- 金子隆一[2022]「特集:ライフコースの統計学」『統計』73-9：2-3
- 森岡清美 [1993]『決死の世代と遺書 太平洋戦争末期の若者の生と死 (補訂版)』吉川弘文館
- 森岡清美・井上俊・斎藤次郎・中野収・川崎賢一・石川実・天野正子・鶴見俊輔・大村英昭・正岡寛司[1996]『ライフコースの社会学』岩波書店
- G.H. Elder Jr. [1977] Family History and the Life Course, "Journal of Family History" 2-4:279-304
- Elder, Glen H. and Janet Z. Giele eds. [2009], The Craft of Life Course Research, Guilford Press. (=本田時雄、岡林秀樹監訳(2013)『ライフコース研究の技法：多様でダイナミックな人生を捉えるために』明石書店)
- Plath, David W.[1980], ElderLong Engagements: Maturity in Modern Japan, Stanford University Press. (= [1985]『日本人の生き方-現代における成熟のドラマ-』井上俊・杉野目康子訳, 岩波書店)
- Shanahan, M. J., J.T. Mortimer and M.K. Johnson eds. [2015] "Handbook of the Life Course : Volume II" Springer

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山本伸幸	4. 巻 Feb-67
2. 論文標題 占領期林政下における地域森林管理の諸相: 秋田県林野経営協議会と山形県国有林野経営協議会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 林業経済研究	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4005/jjfs.102.24	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Md Danesh Miah, Miki Aturo	4. 巻 5(3)
2. 論文標題 Perspectives on REDD+ finances from donor to the developing countries: experience from Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Geology, Ecology, and Landscapes	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/24749508.2021.1923289	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 中島弘二・竹本太郎・中山大将・永井リサ・米家泰作・三島美佐子・水野祥子	4. 巻 1月16日
2. 論文標題 帝国林業, 森林, 林学 帝国の自然をめぐる科学的まなざし	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 E-journal GEO	6. 最初と最後の頁 146-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4157/ejgeo.16.146	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人	4. 巻 1644
2. 論文標題 富士南麓公有林の系譜と地域対応: 150年の時空と経路依存性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人	4. 巻 1645
2. 論文標題 富士南麓公有林の地元関係: その分岐点と境界領域	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人	4. 巻 1646
2. 論文標題 富士南麓の財産区有林と関連団体: 公・共・私の境界領域と地域ガバナンス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 40-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人・志賀薫	4. 巻 1647
2. 論文標題 平成の市町村合併と市町村・財産区有林: 山林保有・管理組織の動向と地域性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人・早船真智	4. 巻 1648
2. 論文標題 大規模市有林の委託管理と循環利用: 持続可能な受託組織と費用負担の模索	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人	4. 巻 1649
2. 論文標題 北海道のグループ認証と市町村有林の循環利用:SGEC認証の新展開と標準化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人	4. 巻 1650
2. 論文標題 持続可能な公有林管理と地域協働:「在所の森」の未来と協働論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本伸幸	4. 巻 1636
2. 論文標題 日本における森林計画制度の起源	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 志賀和人	4. 巻 1634
2. 論文標題 SGEC森林認証制度の創設とその後の展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山林	6. 最初と最後の頁 18-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹本太郎	4. 巻 67(1)
2. 論文標題 日本帝国における植林地森林官の思想と行動：齋藤音作の前半期の足跡から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 林業経済研究	6. 最初と最後の頁 16-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20818/jfe.67.1_16	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本伸幸	4. 巻 102-1
2. 論文標題 日本における森林計画制度の起源	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本森林学会誌	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4005/jjfs.102.24	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤周平・土屋俊幸・竹本太郎	4. 巻 6
2. 論文標題 社会構造と住民参加からみる山村の地域諸集団の実態 - 飯田市上村地区程野集落を事例にして -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学輪	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹本太郎	4. 巻 17
2. 論文標題 遠山森林鉄道の資料および道具類・遺構群	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 森林科学	6. 最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11519/jjsk.87.0_34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢作郁瑠・三木敦朗	4. 巻 Jan-66
2. 論文標題 上高地の自然資源管理における重層的合意形成：国立公園の協働型管理に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 林業経済研究	6. 最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20818/jfe.66.1_61	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三木敦朗	4. 巻 286
2. 論文標題 国有林「コンセッション」の問題点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済	6. 最初と最後の頁 95-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三木敦朗	4. 巻 39
2. 論文標題 資本の一里塚として「新たな森林管理システム」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農業・農協問題研究	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 亀岡鉦平・長友昭・三木敦朗	4. 巻 54
2. 論文標題 学界動向	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農業法研究	6. 最初と最後の頁 132-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三木敦朗	4. 巻 Apr-56
2. 論文標題 書評 大洪水の前に：マルクスと惑星の物質代謝 斎藤幸平著	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊経済理論	6. 最初と最後の頁 82-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本伸幸
2. 発表標題 岐阜県山林行政機構の独立に関する覚え書き
3. 学会等名 日本森林学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本伸幸
2. 発表標題 「今も続く原子力災害による森林・林業・山村への被害と復興」コメント
3. 学会等名 林業経済学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本伸幸
2. 発表標題 自治体林政における森林技術者の周流
3. 学会等名 日本森林学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤周平・山下詠子・竹本太郎
2. 発表標題 上越市不動地区における集落合併の要因 - 集落財政「皆済勘定」の収支構造に着目して -
3. 学会等名 林業経済学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹本太郎
2. 発表標題 日本帝国における森林管理の量的把握
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本伸幸
2. 発表標題 占領期林政下における地域森林管理の諸相 - 秋田県林野経営協議会と山形県国有林野経営協議会 -
3. 学会等名 林業経済学会2019年秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本伸幸
2. 発表標題 ノルウェー森林白書を読む
3. 学会等名 第131回日本森林学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 角谷 黎・山本美穂・林 宇一
2. 発表標題 大正世代農家の林野利用及び土地異動 - 栃木県那須烏山市大木須「長山家日誌」より -
3. 学会等名 林業経済学会2019年秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本美穂・大堀瑞生・林 宇一・角谷 黎
2. 発表標題 原発事故による原木しいたけ生産及び原木調達構造の変化 - 栃木県の事例より -
3. 学会等名 林業経済学会2019年秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三木敦朗
2. 発表標題 林業機械化の機械論的考察
3. 学会等名 林業経済学会2019年秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三木敦朗
2. 発表標題 人材育成か、労働者教育・エンパワーメントか
3. 学会等名 第131回日本森林学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 志賀和人
2. 発表標題 PEFC規格改正とSGECの対応
3. 学会等名 林業経済学会第56回研究会Box
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 山本伸幸	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 694
3. 書名 「経営と管理」日本森林学会編『森林学の百科事典』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「私有林問題の歴史・経営認識と分析方法」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「森林管理の国際化と SGEC 認証規格」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「山林保有と林業経営体の統計把握」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「後発地拡大造林の展開と農林家」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「戦後造林地の利用間伐と森林組合」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「大規模社有林の経営管理と企業組織」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「戦後造林地の主伐・再造林問題」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本林業調査会	5. 総ページ数 456
3. 書名 「森林管理の持続性と組織・制度形成」志賀和人編著『現代日本の私有林問題』	

1. 著者名 三木敦朗	4. 発行年 2020年
2. 出版社 信濃毎日新聞社	5. 総ページ数 128
3. 書名 「調理や暖房確保 非常時に有効まきストック」信州大学防災減災センター編『教えて！信州からの防災学』	

1. 著者名 三木敦朗	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 694
3. 書名 「政策と法制度」日本森林学会編『森林学の百科事典』	

1. 著者名 竹本太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 659
3. 書名 「薪ストーブの歴史」日本森林学会編『森林学の百科事典』	

1. 著者名 竹本太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 659
3. 書名 「植民地の森林管理」日本森林学会編『森林学の百科事典』	

1. 著者名 竹本太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 659
3. 書名 「緑肥・燃材」日本森林学会編『森林学の百科事典』	

1. 著者名 竹本太郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 659
3. 書名 「愛林・植樹・緑化」日本森林学会編『森林学の百科事典』	

1. 著者名 志賀和人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 海青社	5. 総ページ数 222
3. 書名 『森林認証と標準化・SDGs』安藤直人・白石則彦編 『概説 森林認証』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 美穂 (Yamamoto Miho) (10312399)	宇都宮大学・農学部・教授 (12201)	
研究分担者	竹本 太郎 (Takemoto Taro) (10537434)	東京農工大学・(連合)農学研究科(研究院)・講師 (12605)	
研究分担者	早船 真智 (hayafune Masato) (20781595)	国立研究開発法人森林研究・整備機構・森林総合研究所・研究員 (82105)	
研究分担者	奥山 洋一郎 (Okuyama Yoichiro) (30468061)	鹿児島大学・農水産獣医学域農学系・助教 (17701)	
研究分担者	三木 敦朗 (Miki Aturo) (60446276)	信州大学・学術研究院農学系・助教 (13601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	志賀 和人 (Shiga Kazuhito) (70334034)	一般財団法人林業経済研究所・一般財団法人林業経済研 究所・フェロー研究員 (82672)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関